〝小沢有罪〟の3点セットが揃った！

法廷傍聴記

森 功 ノンフィクションライター

3人の元秘書がもし有罪になれば、その威光は失墜するだろう

金庫番だった大久保元秘書

ふんぞり返っていた石川議員

裁判長に注意された森ゆうこ議員

小沢サイドで証言した水谷功元会長

爆弾証言をした山本社長

「ちょっとテンションがもう、ガ～ッと下がっちゃっていますので。立て直しさせていただけたら、と思います。続きは午後から、にさせていただければ……」

小沢一郎元秘書の弁護人が、裁判長に向かってそう願い出ると、張りつめていた法廷の空気が一挙に緩んだ。勢い込んで反対尋問に立ったはずの弁護人から思わずもれた率直な弱音に、傍聴席から笑いが起きる。それが、公判の成り行きを象徴していた。

黄金週間明けの五月十日、小沢一郎事務所の三元秘書が政治資金規正法違反に問われた陸山会事件の第十一回公判が、東京地裁の一〇四号法廷で開かれた。弁護側の反対尋問に先立ち、検察側の要請により証人として出廷したのが、ダイナマイト業者「日本発破技研」社長の山本潤である。その証言は、痛烈だった。

「平成十八（二〇〇六）年七月、水谷建設の脱税が摘発されました。その直後に大久保（隆規）被告人と話したことがありますか」

検察側による主尋問の締めくくりに、公判検事は証人の山本に質問した。山本がおもむろに答える。

「当日だったかと思いますが、大阪の北浜で食事をしているときに、大久保さんから携帯に電話をちょうだいしました。『水谷建設さんが大変なことになっていますね。ついては水谷建設からちょうだいしたお金は、ぜんぶ山本さんに返したことにしたいと思います』と。私が同席した東京全日空ホテル（現・ANAインターコンチネンタルホテル東京）で渡されたお金のことだと思いました」

松阪肉と現金百万円を持参

まさしく爆弾証言。口裏合わせとしか言いようがない電話内容である。

被告人や弁護人の表情がこわばり、法廷が静まり返った。傍聴席まで重苦しい空気に包まれる。ある意味、その空気から解放してくれたのが、冒頭の弁護人の弱音といえた。

既報の通り陸山会事件では、起訴された三元秘書のうち、大久保と石川知裕が水谷建設元社長の川村尚からそれぞれ五千万円ずつ現金を受け取ったとされる。石川が〇四年十月十五日、大久保が翌〇五年四月十九日、場所はともに全日空ホテルだ。

その合計一億円の水谷建設による裏献金のうち、二回目の授受に立ち会ったとされるのが、ダイナマイト業者の山本である。拙著『泥のカネ』にも登場する小沢裏金問題のキーマンであり、公判での注目度は高い。

山本は、裏献金の目撃者というだけではない。そもそも水谷建設が小沢一郎事務所に近づくための水先案内人だとされる。そのうえ小沢一郎の選挙の陣中見舞いや料亭での接待にまで立ち会っている。公判で水谷マネーの解明をめざす検察側にとって、とっておきの証人だ。泥にまみれた裏ガネを巡る小沢法廷は、最大の山場を迎えている。

この山本出廷の前には、もう一つ大きな山もあった。四月二十七日の第十回公判。水谷建設元社長の川村の証人出廷だ。裏金を渡した張本人だけあって、小沢陣営も気が気でなかったに違いない。この日は永田町の小沢ガールズまで法廷に駆けつけていた。

アハハ……。ふだんは静かな法廷内に、下品な笑い声が響く。誰かと思えば、森ゆうこ参議院議員とその御一行だ。川村の証言を揶揄するかのような態度に、裁判長から、「静かにして」と、たしなめられる一幕まであった。ただし、公判は順調に進んだ。

あまり報道されないが、かつての最高実力者は法廷で大ピンチである。第三者である証人に現金授受のシーンを赤裸々に再現されたうえ、元秘書の懐柔工作まで暴露されてしまった。ついにもう一方の主役・水谷功元会長が登場。〝小沢法廷〟は大きな山場を迎えた。

「誰に大久保さんを紹介してもらったのですか」

公判検事の質問に、証言台の川村が冷静に答える。

「平成十五（〇三）年十一月、協力業者（下請けのこと）である日本発破技研の山本潤さんに紹介していただきました。昔から山本社長と大久保さんは知己であると聞いていましたので、議員会館にある小沢先生の事務所で」

言うまでもなく、水谷建設が小沢事務所に近づこうとしたのは、岩手県の胆沢ダム工事を受注するためだ。業者の陳情窓口が金庫番の大久保である。大久保は前任者から窓口をバトンタッチされたばかりだったため、水谷側は面識すらない。そこで、つなぎ役を果たしたのが、山本だった。

山本は下請け業者として、元会長の水谷功をはじめ水谷建設とは旧知の間柄だが、一方で日本青年会議所の会頭まで務めた名士でもある。その縁で大久保とも古くからの知り合いだったため、水谷建設社長の川村を引き合わせたという。

「どのようにすれば（大久保と親しくなれるか）考えましたか」

公判で川村が検事からそう尋ねられる。と、次のような新事実まで飛び出す。

「平成十五年の大晦日でした。ご自宅に伺い、お歳暮の品としまして松阪肉と現金百万円を持参しました」

法廷には、傍聴席から見て証言台のすぐ右に被告人席がある。奥から大久保、石川、池田光智の順で、元秘書たちが腰かけていた。その態度は三者三様だ。

大久保は背筋を伸ばして青白い顔に黒ぶち眼鏡をかけ、鳥のように口を尖らせて証人をじっと見つめる。

手提げ袋を滑らすように

「平成十六年九月、山本社長と私で議員会館の小沢事務所をお訪ねしました時、（大久保から）ご指示がありました。胆沢ダム堤体盛立て工事が決まった後に五千万円、原石山工事の後に五千万円、合計一億円の要求がありました」

川村証言が佳境に入る。最初の石川への五千万円の裏金提供は、ダム工事の受注合戦さなかの十月。現金受け渡しは、全日空ホテルのフロントに近いソファーだという。弁護側はそんな目立つ所で現金のやり取りなどするわけがない、と反論してきた。

対する検察側は、ホテルロビー写真のカラーコピーを持ち出し、川村と石川の座ったソファーの位置関係をわかりやすく示す。

問題の五千万円は、クロネコヤマトの茶色の紙袋に詰め、手提げ袋でそれを持ち運んだ、と川村は言った。

「手提げ袋を滑らすように、石川さんのほうへずらしました」

さすがに生々しい。裏金を運んだ張本人による状況ほとんど表情を変えない。が、さすがに歳暮の話になると尖った口がゆがむ。

対照的なのは中央の石川だ。淡いグレーの夏のスーツをまとい、腕を組んでふんぞり返っている。よほど水谷建設の元社長が憎らしいのか、終始、川村を睨みつけていた。